



東陵高生と交流するアメリカの中・高生たち

被災体験聞く

米国の
中高生
東陵高で交流

日本の文化を学んで
いるアメリカのポスト
ガールズクラブの中・

高生たちが24日、東陵高校の生徒たちと交流。学校生活を見学したり、被災した生徒の体験談などに耳を傾けた。

被災した高校生が伝

道師役となり、被災や復興の情報発信を行う「ビヨンドトゥモロー・アンバサダープログラム」の一環。同クラブの14〜18歳の生徒たちと、同校の生徒11人が交流した。

校舎や部活動の様子を見学したアメリカの生徒たちを前に、3年の木皿圭祐君が「交通手段や連絡が取れず、1週間後に自宅のある南三陸町に帰った。何もかもが無く、想像を絶する被害に呆然とした」と報告。

藤本朱子さんは「震災直後に被災者が次々に避難してきたので、ボランティアに汗を流

した。友達と毛布1枚でその日の夜を過ごし「た」などと震災当時の状況を語った。アメリカでの震災に関する報道は、福島第1原発の状況がメインで、津波被害の報道は少なかったという。

一行は、25日まで滞在し、被災した高校生から直接被災地を案内してもらった後、体験を発表し合った。